

妻の役割の道具性と表出性に対する夫の評価について  
 広島大教育 伊藤留美

目的 女子差別撤廃条約をめぐるとの問題は政治、経済から教育の分野まで種々の影響を与えた。この問題の根柢には性別役割の固定に対する批判を含み、常に社会的、経済的価値を含んだ評価が役割そのものの評価となり、差別感として意識されているように思われる。しかし、家族の再生産と福祉を追求する家族集団においても全く同じレベルで評価できるαであろうか。安定化の機能が家族にとって重要である今日、現実には夫は妻に対して外的評価と同様の評価を与えているαか、どうかを調べるために、妻の役割をParsonsの道具性と表出性から捉えて、夫が妻に対していづれを重くみているかを検討した。

方法 値間紙法によって道具性、表出性のそれぞれの内容を含んだ役割を5個ずつ用意し、ランダムに対をつくり、どちらが自分(夫)にとって大切であるかを/対比較法によって45対の組合せにテックさせた。対象は教員(高校)、研究者(自然科学系大学教官、試験場技術者)、ホワイトカラー、ブルーカラーα有配偶男子。

結果 夫の職業、年齢、収入、妻の有職子数α変数によって結果を比較した。職業別では、教員、研究者群が表出的役割を高く評価しているαに対し、ホワイトカラー、ブルーカラー群は道具的役割に重きをおくような相反する傾向がみられた。また、/対比較法によって各項目が重要であるαとして選択されている順位からみれば、最高α表出的役割は4群とも一致しているが、ブルーカラーが2位に選んだ道具性は他の3群では8位から10位に位置づけられていた。このように夫の職業によって妻への道具性、表出性の評価がかわれることを示している。